令和元年度　東浦ふるさとガイド協会　秋のガイド研修会　　2019 年 11 月 19 日

本居宣長、松坂商人、松坂木綿と松坂城跡

浪崎　正憲

11 月 19 日秋の研修会に選んだのは、松坂城跡と本居宣長（もとおり のりなが）さらには松坂商人と松坂木綿を生んだ町「松阪（まつさか）市」をマイクロバスで訪ねました。
参加者 26 名は秋晴れに恵まれて、見どころいっぱいの松阪を堪能することが出来大満足の一日でした。

1　蒲生氏郷（がもう うじさと）が築いた松坂城と御城番屋敷（ごじょうばん やしき）

織田信長亡き後、羽柴秀吉に仕え天正 12 年（1584）12 万石の所領を与えられた蒲生氏郷は、天正 16 年（1588）城づくりを始めて 3 年で完成させ、新しい城に本拠を移し蒲生家に吉祥をもたらす「松」の字と、秀吉の本拠地「大坂」の「坂」の字を合わせ「松坂（まつさか）」と名付けました。
松坂城は、北側を流れる阪内川（さかないがわ）を防御ラインとした要害の地に立地しています。
築城当時の石垣は「野面積み（のづらづみ）」で、その石垣を注意深く観察すると、古墳の石棺などの部材も使用されていることが分かります。

松坂は元和 5 年（1619 年）に紀州藩に属し、松坂城代役所をはじめとする出先機関が置かれました。御城番屋敷は、松坂城の警備を任務とする紀州藩士とその家族の住居として文久 3 年（1863 年）に建てられました。約 1 ヘクタールの屋敷地の中に 2 棟の主屋があり、東棟は 10 戸・西棟は 9 戸（元は 10 戸）で、ほかに前庭，畑地、土蔵などがあります。
屋敷は、子孫の方々が明治維新の時に「苗秀社（びょうしゅうしゃ）」を創設し激変の世を乗り越えます。明治になって合資会社に、さらに平成 28 年に合同会社に変更され今日に至っています。
今は借家として利用されており、そのうちの 1 戸を市が借り受けて一般公開しています。
左の写真に見るように二つの棟の間の通路は石畳が敷かれ、それぞれ生け垣にかまれた長屋と言ったたたずまい。
間取りは、いわゆる六八という六畳と八畳が二間続きに、厠（かわや）と「流し」それに土間があります。テレビで見る「八さんや、熊さん」が住む一間だけとはかなり差がある立派なものです。
二の丸跡から眺めると緑の生け垣に囲まれて 2 棟の長屋がひときわ目立つ、この景色こそ松坂城のシンボルともいえるものです。
そのすぐ隣には三重県立松阪工業高校と松阪神社がありますが、これらは何れもお濠の中側にあります。
この他に城内には、「松阪市立歴史民族資料館」と「本居宣長記念館」と「鈴屋（旧宅）」があります。

２　本居宣長（もとおり のりなが）とすばらしい記念館

本居宣長の名前は知っているものの、その生い立ちや成し得た業績については良く知らないのが実情です。記念館の規模や斬新な展示スタイルも、それと若い女性が数人も対応している様に驚きました。これだけの体制を維持していくことは相当な予算措置がない限り不可能と思います。本居宣長を市民はもちろん市外の人にも、その業績を称えていくことに誇りと責任を感じている表れと思います。つまりは、松阪市がそれだけの必要性を感じていることにほかならず、市の意気込みを感じます。

①　本居宣長はどんな人か

彼は伊勢松坂の豪商・小津家の次男で、江戸時代の国学者・言語学者であり、医師でした。
また、荷田春満（かだのあずまろ）、賀茂真淵（かもまぶち）、平田篤胤（ひらたあつたね）と並ぶ「国学の四大人」の一人でした。

一度は養子に行きますが、３年後に離縁して松坂に戻ります。その後京都へ遊学して医学を学び、さらに儒教、朱子学を学びます。
そして、京都から松坂に戻り医師を開業し、自宅で源氏物語、日本書紀の研究に励みました。一時は、紀伊藩に仕えますが、生涯の大半を学者として過ごしました。そして、69 歳にして古事記伝を完成させます。
面白いことに、彼は鈴のコレクターで珍しいものを多く所有していたといいます。その極みは自宅に「鈴屋」という屋号までつけていました。

②　国指定特別史跡の宣長旧宅跡

城のお濠から通り２本離れたところに本居宣長の旧宅があります。上の写真がそれで、国の特別史跡に指定されています。宣長が１２歳から７２歳の生涯を閉じるまでの６０年間を過ごした場所です。宣長はここで医者を開業するかたわら、日本の古典を研究し「古事記伝」の著述を残し、また多くの門人を指導しました。
この家は明治４２年に松阪公園に移され、宣長の愛称である「鈴屋」の名称で今も親しまれています。

３　松坂商人「小津家」と松坂木綿（まつさか もめん）

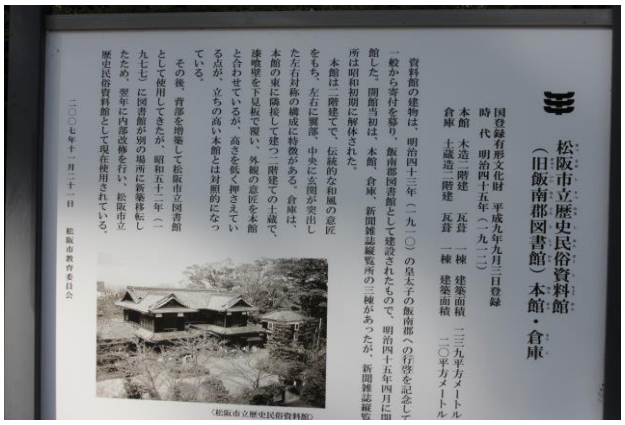
松坂商人は大阪商人、近江商人と並ぶ三大商人と言われています。松坂は江戸時代になると商人の街として栄えました。三井、小津、長谷川、長井、殿村などの豪商はいち早く江戸や、京、大阪に店を構えました。江戸店持ち松坂商人は、日本橋周辺の大伝馬町、本町、駿河町などにありましたが、大伝馬町一丁目には、松坂木綿を扱う店が集まっていました。
18 世紀初めの記録によれば、町内の木綿店 74 店のうち伊勢の国出身者が、6 割を占めていました。
そのため江戸の街には伊勢屋の屋号が多かったようですが、その中でも松阪商人が最も多くいました。

①　　小津清左衛門（おづせいざえもん）

松坂商人の中でも小津清左衛門はじめ、「小津 50 党」と称されるほど小津姓を名乗る商人が多く現れ

ました。　その小津家創業の祖と言われるのは、３代小津清左衛門長弘（おづせいざえもん ながひろ）です。彼は大伝馬町一丁目に紙店小津屋を開業し、次には木綿店を開業します。宝暦５年には、三井、長谷川、長井らとともに紀州藩松坂為替御用を命じられます。

明治以降は銀行、紡績工場などを設立して多角経営に乗り出しますが、関東大震災や金融恐慌などの難局を乗り切るため、本来の和紙問屋に復し、現在は創業以来の地で「小津産業株式会社」として紙業と不動産業を継続しています。



②　デザインに優れた松坂木綿（まつさか もめん）

お濠を渡り石垣を見ながら進むと最初にあるのが「松阪市立歴史民俗資料館」です。

この建物は明治４５年に飯南郡図書館として開館した、総二階建てのどっしりとした和風建築です。

昭和５３年に新しい図書館が建てられたのに伴い、「松阪市立歴史民俗資料館」として市民の前に姿を見せることになりました。

館内には、近世松阪の商都への発展をもたらした「伊勢白粉（いせおしろい）」と、「松坂商人」の名を知らしめた「松坂木綿」の関係資料を多く展示しています。

松坂地方の織阪時代に綿が渡来すると、この地方はその栽培に適し、木綿織物の一大産地になりました。それに拍車をかけたのが松坂商人で、江戸大伝馬町に軒を並べた木綿問屋へ、寛政初年の記録では 55～56 万反もの松坂木綿が送られていきました。

松坂木綿は、単に品質が優れているだけではなく、縞柄（しまがら）がいわゆる粋好みの江戸庶民に大いにうけ、「松坂縞（まつさか じま）」の名でもてはやされたのです。

以上のように、今回の研修内容を要約しました。